SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

さらば、わが愛　覇王別姫

1993年／中国・香港映画
配給：アスミック・エース／172分

2022（令和4）年6月25日鑑賞	テアトル梅田

Data　２０２２－７５

監督：陳凱歌（チェン・カイコー）
原作：李碧華（リー・ピクワー）『さらば、わが愛　覇王別姫』
出演：張國榮（レスリー・チャン）／張豊毅（チャン・フォンイー）／鞏俐（コン・リー）／葛優（グォ・ヨウ）／雷漢（レイ・ハン）

みどころ

１９８２年に北京電影学院を卒業した後、共に世界に羽ばたいた張藝謀（チャン・イーモウ）と陳凱歌（チェン・カイコー）は、１９８０年代の『紅いコーリャン』（８７年）と『黄色い大地』（８４年）で好敵手になったが、９０年代には、『活きる』（９４年）と本作『さらば、わが愛　覇王別姫』（９３年）で、再び対抗！日本軍の大陸侵攻を含む、激動の中国現代史は複雑だが、面白い。新中国建国後の国共対立と文化大革命の激動も興味深い。しかし、そんな中、人々の生活は？

『活きる』の主人公は金持ちのボンボンだったが、本作の主人公は子ども時代共に京劇俳優養成所で厳しい訓練を受けた段小楼と程蝶衣。２人は、京劇『覇王別姫』の大スターに上り詰めたが、そこに女郎あがりの菊仙が段小楼の妻として登場してくると・・・？

激動の中国現代史と『覇王別姫』をしっかり勉強しながら、陳凱歌の最高傑作をしっかり楽しみたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■３０年前の“超名作”を２０年ぶりに再々鑑賞！■□■

今年２０２２年は、田中角栄と周恩来の握手に象徴される、１９７２年9月２９日の「日中国交回復」５０周年の年だが、２月２４日のロシアによるウクライナ侵攻を受けて、西側VS東側の対立が深まる中、日中関係はよろしくない。

私が陳凱歌（チェン・カイコー）監督の“超名作”、『さらば、わが愛　覇王別姫』をはじめて見たのは、日中国交正常化３０周年記念として、シネ・ヌーヴォが２００２年１２月２１日から２００３年2月７日まで「中国映画の全貌２００２－３」を開催し、６３本の中国映画を一挙上映した時だ。「年末年始なら、なんとか時間が取れる。何としてもたく

さん見ておかないと・・・」と考え、５回券を２枚買った。そして、２００４年６月１９日から７月３０日までシネ・ヌーヴォが開催した「中国映画の全貌２００４」で２回目の鑑賞をした。

そんな“超名作”がなぜか今、テアトル梅田で上映されていると知れば、こりゃ必見！劇場に聞くと、「土日は満席も！」とのことだったので、午前中にわざわざチケットを購入して席を確保し、午後から劇場へ。列をなしている人の中では、あちこちで中国語も。思いがけず、こんな企画をしてくれたテアトル梅田に感謝！

■□■字幕は不是簡体字。不是中国映画、是中国・香港映画■□■

本作は１９９３年に公開されたが、２００２年の鑑賞時に私が知っていた俳優は鞏俐（コン・リー）だけ。彼女は張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『紅いコーリャン』（８７年）（『シネマ５』７２頁）で目に焼き付いてしまった美人女優だ。当時の私は、京劇の「覇王別姫」の項羽を演じた本作の段小楼役の俳優、張豊穀（チャン・フォンイー）は全然知らなかったし、「覇王別姫」の別姫を演じた怪しげな女役である本作の程蝶衣役が香港の人気俳優、張國榮（レスリー・チャン）だということも知らなかった。また、２０年前に見た時は中国語が全然わからなかったが、今は中国語検定３級とHSK５級に合格しているので、ある程度読めるし、聞き取ることもできる。そのため、今回はじめて本作が簡体字でないことを知り、また、本作が中国映画ではなく、中国・香港映画であることを知ることができた。

■□■第五世代監督代表として北京電影学院卒業後、世界へ！■□■

陳凱歌は、張藝謀監督や田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）ら、後に「第五世代監督」と呼ばれる面々とともに、１９６６年から７７年まで続いた文化大革命が終了したため再開された北京電影学院に１９８７年に入学し、１９８２年に卒業した後に映画制作を開始し、一気に世界中に“中国ニューウェーブ”を知らしめた人物だ。彼を一躍有名にしたのは『黄色い大地』（８４年）（『シネマ５』６３頁）だが、１９７８年から改革開放政策が始まっても、１９８９年には天安門事件が発生したから中国は大変。映画製作も激変する政治情勢に左右されるのは仕方ない。

そんな時代状況の中、張藝謀が監督した『菊豆』（９０年）（『シネマ５』７６頁）、『古井戸』（８７年）（『シネマ５』７９頁）、『活きる』（９４年）（『シネマ５』１１１頁）等にはビックリ！よくぞ、ここまで中国社会の問題点を直視した映画が公開できたものだ。ちなみに、『青い凧』（９３年）（『シネマ５』９８頁）の田壮壮監督は中国当局の批判を受け、１０年間映画を撮ることを許されない処分を受けている。

そんな彼らと同じように、『黄色い大地』の翌年に『大閲兵』（８５年）（『シネマ５』６９頁）を作った陳凱歌監督は、１９９３年に本作を監督したが、それが中国映画ではなく、中国・香港映画になったのは、ある意味で必然・・・。

■□■京劇 VS 歌舞伎。京劇では訓練さえ受ければ大スターに？■□■

本作は１７２分の長尺だが、ある瞬間に段小楼と程蝶衣が登場するまでは、少年時代の小石頭と小豆子の厳しい訓練風景が清朝末期の時代状況の中で描かれる。今ドキの邦画のスクリーンはとにかく明るく美しいものが多いが、１９９３年公開の本作はそうではない。今で言えば、完全な“児童虐待”と糾弾されるはずの、京劇俳優養成所での訓練風景に圧倒されるだけではなく、モノクロ風のなんとも言えず印象深い撮影技術にも圧倒されるはずだ。苦しい中で互いに助け合っていた仲間である小癩が自殺で死んでしまったのは残念だが、自慢の石頭をそのまま芸名にしていた先輩・小石頭は順調に成長したし、女郎の私生児として養成所に連れてこられた小豆子は小石頭に思慕の念を抱きながら共に成長したから大したものだ。

歌舞伎では“血筋”や“家柄”が重要だから、各家元に生まれてきた男の子は、今ドキの日本では珍しく、幼い時から厳しい訓練を受けることになる。しかし、それは本作に見る小石頭や小豆子に対する訓練の厳しさとは全く異質のものだ。しかし、それだけの訓練を受けただけに、成長した段小楼と程蝶衣の京劇役者としての力量は？京劇では、厳しい訓練さえ受け入れれば、誰でも大スターに？

それぞれ段小楼、程蝶衣の芸名を名乗り、「覇王別姫」の共演でトップスターになった２人だが、段小楼は置屋の女郎である菊仙（鞏俐（コン・リー））とねんごろになっていく一方、程蝶衣は彼の女役としての怪しい魅力にぞっこんになった、京劇界の重鎮で同性愛者でもある袁四爺（葛優（グォ・ヨウ））とねんごろに・・・。日本軍による中国大陸侵攻が始まり、時々刻々と権力者が揺れ動く時代状況の中、２人の京劇人生のスタートは、如何に？

■□■波乱の京劇人生のスタートは袁四爺との出会いから！■□■

清朝末期は、中国にとって西欧列強からの帝国主義的侵略に続いて、大日本帝国からも中国大陸への侵攻を受けた屈辱の時代。「腐った清王朝ではダメ」と認識し、開明的な思想を武器に“革命”を目指して日本に留学した孫文は、中国に帰った後に、大活躍したが、それより前に“腐った清王朝”に代わって中国を支配したのが袁世凱。彼は後の軍閥として力を発揮し、政界にものし上がってくる張作霖と共に、清朝末期の中国では有名かつ特記すべき人物だ。彼が本当はどんなキャラだったのか私は知らないが、本作の袁四爺を見て、私は袁世凱＝袁四爺と考えてしまったが、それは完全な誤解で、袁世凱は１９１６年に死亡している。しかして、本作に見る京劇界の重鎮として、また、（女形の）役者の被護者（同性愛者）としての袁四爺は・・・？

近時大活躍の張藝謀監督の『愛しの故郷』（２０年）の第１話『続・Hello 北京』（『シネマ４９』２４３頁）で大活躍している俳優が葛優（グォ・ヨウ）。彼は『狙った恋の落とし方。』（０８年）で大人気になったが、私は、『活きる』での素晴らしい演技を見た時から彼の大ファンになっていた。そのグォ・ヨウが本作では袁四爺役で登場し、味わい深い演技

を見せてくれるので、それに注目！

■□■２人の京劇人生は激動の中国現代史と共に！■□■

『活きる』の主人公・福貴は、贅沢な家庭に育ちながらサイコロバクチにうつつを抜かす男だったが、１９４９年の新中国建国前後の激動の中国現代史の中で、したたかに生き抜く姿が感動的だった。そこには、一度は愛想をつかしながら、再び福貴のもとに戻ってくる、鞏俐扮する妻・家珍の強い支えがあったから、同作は夫婦愛の物語としても絶品で涙を誘った。

それに対して本作は、子供の時から京劇俳優養成所で厳しい訓練を受け、やっと今、京劇スターとして花開いた段小楼と程蝶衣の兄弟愛が中心だったが、そこに女郎だった菊仙が段小楼の妻として入り込んでくるため、終始一貫、奇妙な三角関係がストーリーの中核になる。それが非常に面白いのは、日本軍が大陸に侵攻してくる中、袁四爺と程蝶衣との同性愛も長く続かず、本作の主役として登場する３人の男女の運命が否応なく激動の時代の流れの渦の中に巻き込まれるためだ。激動する時代の中で生きていくためには、時の権力者に迎合することも必要！そんな経験は誰にでもあるが、そんな立場ばかり主張していたのでは、身が持たない。『活きる』に見る福貴はとりわけそれが強かったし、本作に見る段小楼と程蝶衣もそうだ。子供の時から石頭を自慢にしてきた段小楼は、大人になってからも自我の主張が強かったから、何かと大変。程蝶衣や菊仙のとりなしで、何とかそれをしのいでいたが、文化大革命が進み、京劇そのものが旧体制の遺物だとして否定されてくると・・・？さあ、激動の中国現代史の中で、２人の主人公は如何に？

■□■成長した捨て子は毛沢東思想にどっぷり！師弟対決は？■□■

本作に見る京劇俳優養成所がどんなシステムで成り立っているのか、私にはサッパリわからないが、女郎の私生児として、母親から捨てられるように養成所に入れられた程蝶衣が、兄弟子・段小楼の“指導よろしき”を得て成長し、大スターになったのは立派。そんな程蝶衣だから、ある日、養成所で目にした「捨て子」を見捨てることができなかったのは仕方ない。しかして、激動する時代の中、師匠の死亡で養成所の解散を余儀なくされた後、程蝶衣の弟子として訓練を受け成長してきた捨て子の小四（雷漢（レイ・ハン））は、１９６６年から文化大革命が始まると、いっぱしの紅衛兵になっていたから、彼の動静にも注目！中国古来の伝統的な価値をすべて“旧幣、旧悪”と決めつけた文化大革命では、知識階級が自己批判を余儀なくされ、焚書坑儒まで実行されたから大変だ。『活きる』では、ベテラン医師が排除され、経験の少ない若い女の子が福貴の娘の出産の処理をしたため、その結果は悲惨なものになってしまった。

段小楼も程蝶衣も、そんな時代状況に“迎合”すれば、京劇のスターとして生きていくこともできたはずだが、『覇王別姫』を捨てて、人民大衆のための演劇を！と言われても・・・。日本敗戦後に北京に入ってきた国民党の兵士たちの『覇王別姫』の鑑賞ぶりには納得でき

なかったが、そうかといって、国民党に代わって新たな支配者になった共産党の演劇論もイヤ。そう考えただけならまだしも、段小楼と程蝶衣が現実にそんな行動をとれば、堕落の象徴として弾圧されている京劇の大スターである段小楼と程蝶衣が“自己批判”を強要されることになったのは当然だ。その結果、１９７０年代の中国のニュースとして、私たちがよく見ていた、あの集団の中での自己批判（吊し上げ）の風景が本作のスクリーン上に広がっていくから、それに注目！そして、それをリードしたのが、今や完全に毛思想に心酔した小四だから、その対比は鮮やかだ。成長した小四が毛思想に心酔するのは自由だが、自分の青春をかけて学んだ京劇を旧体制の遺物として完全に否定してどうなるの？いやいや、そこは大丈夫、毛思想を体現する新たな人民大衆のための芸術は、演劇界でも立派に育っていたらしい。

しかして、文化大革命って一体何だったの？本作では、小四の姿を通じて、『活きる』と同じように、それをしっかり考えたい。

■□■別姫の最期は？覇王の最期は？■□■

日本の歌舞伎では、白塗りの千両役者が見得を切るところが見どころだが、京劇『覇王別姫』の見どころは？中国史を理解し、中国語を勉強すれば、「四面楚歌」という四文字熟語が何を意味するかがよくわかる。また、司馬遼太郎の小説『項羽と劉邦』を読めば、項羽こと覇王の天才性もよくわかる。しかして、別姫とは？

唐の時代では、玄宗皇帝の愛妾、楊貴妃が有名だが、それと並んで有名なのが項羽の愛妾、虞美人、すなわち別姫だ。本作の中では、何度も京劇俳優養成所からの逃亡を繰り返していた程蝶衣だったが、ある日、生の『覇王別姫』の覇王と別姫の演技を見ると涙を流しっぱなしに。それは一体なぜ？本作では、『覇王別姫』の名場面が何度も登場するので、それに注目！しかして、四面楚歌の中、別姫はなぜ自らの首をはねてしまったの？そして、項羽（覇王）の最期は？

本作ラストは、文化大革命の混乱が収まったある時期、２人だけで舞台に立つシークエンスになるので、それに注目。そんな中、２時間５２分という長尺の本作はいかなるラストを？それは、あなた自身の目で感動の涙と共にしっかりと！

２０２２（令和４）年７月４日記

熱血弁護士
坂和章平
中国映画を語る〈32〉

（さかわ・しょうへい）
１９４９年愛媛県松山市生まれ、大阪大学法学部卒。都市開発に関わる訴訟を数多く手がけ、日本都市計画学会「石川賞」、同年に日本不動産学会「実務著作賞」を受賞。『坂和的中国電影大観』（２００４年）、『ナニワのオッチャン弁護士、映画を斬る！』シリーズをはじめ映画に関する著書多数。（公社）日中友好協会参与、NPO法人大阪府日中友好協会理事。

京劇『覇王別姫』を軸に、激変する中国の現代史を綴る

さらば、わが愛／覇王別姫

京劇は、派手な衣装と化粧、そして独特の演技法と発声が特徴の伝統的な舞台芸術である。主要かつ人気のある演目は歴史的な題材が多く、『覇王別姫（はおうべっき）』はその代表的なものだ。

１９２０年代後半、清帝国の時代―。段小楼と蝶衣の２人の少年が京劇の一座の中で、厳しい訓練を受けるところから物語は始まる。当時、中国の北東部を支配していた軍閥の袁世凱は、京劇のファンであり、理解者だった。一座の師匠は徹底したスパルタ教育で、段小楼や蝶衣はしごかれ、罰を受け、逃亡しながらも、次第に京劇の芸を身につけていった。

やがて２人とも成人し、今や段小楼は男役として、張國榮（レスリーチャン）扮する蝶衣は女役として不動の名声を得ていた。２人が演じる『覇王別姫』は、袁世凱の強い応援を受け、とりわけ女役の蝶衣は袁世凱と道ならぬ…の仲に…。

時代は１９３０年代後半、日本の中国進出は拡大し、ついに日中戦争が勃発。日本軍の中国大陸支配が強まる中、蝶衣は日本軍将校の前で彼らのご機嫌をとるために京劇を披露した。

袁世凱の中国北東部支配から、日本軍による中国侵略へ。そして１９４５年の日本軍の降伏。中国は蒋介石率いる国民党の天下となったが、それもつかの間、国民党と共産党の内戦へと突入し、１９４９年10月１日中華人民共和国の成立。中国は共産党の天下となった。絶対的な指導者はもちろん毛沢東である。１９６４年に『毛沢東語録』が刊行され、さらに「文化大革命」の嵐が吹き荒れた。そして「四人組」事件…。激変する時代、京劇の舞台役者として圧倒的な人気を誇った段小楼と蝶衣は、『覇王別姫』を誰のために、どのように演じたのだろうか。

中国を代表する監督・陳凱歌（チェンカイコー）が手掛け、第46回カンヌ国際映画祭でパルム・ドール賞を受賞した本作。京劇『覇王別姫』を通して、激動の中国の現代史を鮮明に描いていく。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

原題：覇王別姫
監督：陳凱歌（チェンカイコー）
出演：蝶衣／張國榮、段小楼／張豊毅、菊仙／鞏俐
製作年：1993年、中国・香港合作、172分
配給：ヘラルド・エース＝日本ヘラルド映画